「コウナイの石」探訪記

東光部　土井眼科　土　井　治　道

はじめに

「コウナイの石」って、お聞きになったこと有りますか？まだどなたも、間近に行ってご覧になったことは無いはずです。場所は、兵庫県飾磨郡家島町の西島の西の端。
ここに、ほぼ球形の直径約８ｍの巨大な石（岩）が有ります。家島と言えば、豊臣秀吉の頃からの採石の島。島の産業は漁業と採石業。離島にあって、全国唯一の人口増加をみる島。島民は採石のおかげで、経済的に廻り巡ってみなさん裕福な生活を送っています。

ところが、過去約30年来の高度成長により、また大型採石機械の導入により、今では島の三分の一、否、半分近く、緑が無くなってしまいました。このことを、ルポライターの荒木有希さんは､明日のために我が身を削る｢おつう」のイメージから「夕鶴の島」と表現しました。（週刊金曜日掲載）そして今、採石のためこの巨大な石の運命に破砕・転落の危機が迫ってるのです。

「夕鶴の島」－男鹿島

約４年前に、小説「コウナイの石」を著わし「コウナイの石」の保存を訴え続けて来た、坊勢島で15年間小児科診療をなさっていた上野忠彦医師（現、郷里・天草）と私は、姫路市医師会の地域保健委員会の所属でした。小説によると古事記のように、家島はオノコロ島であり、この石は神の宿る天の御柱。この石の運命は、家島町の運命、そして、我々、今の日本の社会の運命でもあると…

［古事記を見て下さい｡オノコロ島＝淡路島ではありません｡］

文字通り崖っぷちの「コウナイの石」

実に偶然なことに、本年１月２日、姫路市街の北西にある神の丘とも呼ばれている八丈岩山の頂上で、この第二版である「秘境・家島・コウナイの石」の共著者、伊藤三樹夫さん（詩人）と奇しくも出会いました。この伊藤さんのご紹介で、神戸新聞の記者さんのお世話で、私も「コウナイの石ツアー」に参加することが出来ました。

記者さん、伊藤さん、荒木さん、はじめ、神戸から２名、加古川から６名、姫路から３名、坊勢汽船さん、島の方々３名、総勢十数名でした。

旅日記

平成12年２月20日。夜来の雨が、飾磨港に集合した朝９時頃には上がり、青空さえ見え

てきました。坊勢までは、快適な坊勢汽船で約30分の爽快な船旅。そこからチャーターの船で約10分。時速50㎞ の魚運搬船。「イカナゴ」の気持ちが少し分かるようになったような、ものすごい経験でした。(北朝鮮船が逃げたのが60㎞ らしいです。)

西島の、とある桟橋に着きました。この西島も採石の島で、家島本島と大きさは同じくらいですが、現在島民はわずか30人ぐらいと聞きます。採石会社のバスで、月面のような岩石砂漠地帯を通って、山の中腹へ。このバス、ナンバーなし、一部窓ガラス無し、……勿論、保険無し。ここからコウナイの石神様まで雨上がりの山道を歩くこと約10分。少し向こうの小高い所に、石神様は一人ぽつんと私たちを待ち続けて居て下さいました。

ほほ笑む「コウナイの神」

なんと云う神々しさでしょう。なんと云う喜びを感じさせる姿でしょう。
私は、思わず走り寄っていました。当日、天気は寒い曇り空にもかかわらず、その直径8mもある大きな石の回りだけ、光っているようでもありました。
日の光。海の輝き。風の音。むこうに小豆島、日生、赤穂、相生、御津あたりの山々。時間が止まりました。太古からの生命の息吹を感じます。
そっと石に手を当ててみる。ぬくもりを感じます。なぜでしょう。やはり、コウナイの石神さまは生きていらっしゃる様です。

泣いているような石神

でも、そこから約30m離れたところは、採石のため断崖絶壁になっているのです。これ以上、島を削ると、もう保存は不可能でしょう。文字どおり、崖っぷちに立っている「コウナイの石」。私たちは、後ろ髪を引かれる思いで帰途に着きました。

また、会えるでしょうか。もう、逢えないのでしょうか。

姫路の飾磨の港から、たったの一時間で、こんな別世界があるなんて、とても不思議です。でも、残念ながら現在ここには普通の船便も有りませんし、採石会社の立ち入り許可も必要でしょう。保存して、公園化出来れば良いのですが…そのことを、切に希望しております。

最後に、付け加えるまでもなく、坊勢の島で、暖かく素朴な人情に触れ、美味しい魚料理をたらふく頂戴した事は、当然のことでは有ります。

飾磨の港に下り立った時、また冷たい雨が降り始めました…

(H12. 2. 20　回想記)